

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：32644

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K12917

研究課題名(和文)韓国語リーディングにおける流暢性向上のための新たな表記指導モデルの開発

研究課題名(英文) Developing a New Teaching Model Based on Note-Taking in Order to Improve Reading Proficiency in Korean

研究代表者

キム ミンス(Kim, minsoo)

東海大学・国際教育センター・講師

研究者番号：20734833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では韓国語リーディングにおける流暢性向上のための新たな表記指導モデルを開発することを目的とし、日本人学習者の「分かち書き」の誤りが発話速度とポーズに及ぼす影響を考察した。そして、「分かち書き」の指導法を改善することで韓国語リーディングにおける流暢性が向上できることを示唆した。本研究期間の研究結果として、(1)韓国人留学生における「分かち書き」の使用実態を考察した論文発表、(2)日本人韓国語初級学習者における「分かち書き」の使用実態・認識調査を考察した論文発表、(3)日本人初級学習者の韓国語リーディングにおける音響的特徴が韓国語のリーディング流暢性に及ぼす影響に関する学会発表を行なった。

研究成果の概要(英文)：This report examined the influence that the incorrect placement of spaces between words by Japanese learners of Korean can have on their rate of speech and pauses in order to develop a new note-taking teaching model for improving fluency when reading in Korean. The results suggest that fluency while reading in Korean can be improved by enhancing the instruction method for placing spaces between words. The findings were presented in a paper that analyzes how Korean study abroad students apply spaces between words; another paper that examines the perception of applying spaces between words among Japanese beginner learners of Korean; and at an academic conference presentation on the influence acoustic characteristics have on the fluency of Japanese beginners while reading in Korean.

研究分野：韓国語教育

キーワード：分かち書き 日本人韓国語学習者 流暢性 ポーズ 発話速度 超音速度

1. 研究開始当初の背景

韓国語は日本語と違って「ハングル(韓国語の文字)」のみで書くので、文節ごとに「分かち書き」をする。そして、韓国語の正書法に関する総則には「文の各単語は分かち書きを原則とする」とあり、韓国語において「分かち書き」は文を書く際に適用される表記上の規則である。

ところが、この「分かち書き」を間違えると、次の例1と例2のように意味が変わってしまう場合がある。

例1) 가 / / 가 .
 (父が / 部屋に / 入る)

例2) / 가 / 가 .
 (父 / カバンに / 入る)

しかし、「分かち書き」の誤りは文を書いた時にしか現れず、文法上の問題があまり生じないため、実際の韓国語教育の現場において「分かち書き」に関する指導・教育はおろそかになっているのが現状である。

また、日本人韓国語学習者は、例3のように「分かち書き」を行うべきところを、単語や文節ごとにすべて空けて書く傾向が多く見られる(例4)。

例3) / .
 (私は / 学生です)

例4) / / / .
 (私 / は / 学生 / です)

例4)は韓国語の正書法の規則から外れた場合であるが、意味上の問題は生じないため、これまでの韓国語教育においてはこのような誤りについてもあまり注目して来なかった。

ところで、日本人学習者の発話にはこのような「分かち書き」の誤りと一致する不自然なポーズがよく見られる。そして、この不自然なポーズは韓国語リーディングにおける流暢性を妨げる要因の一つになるものと考えられる。流暢性はコミュニケーションにおいて大きな影響を及ぼすにもかかわらず、現在の韓国語教育の現場では、流暢性より発音や文法などの正確性に重点が置かれている傾向があり、「分かち書き」に関する教育はあまり行われていないと言える。

そこで、本研究では、韓国語のリーディングにおける流暢性の評価指標として、学習者の韓国語の発話速度およびポーズの2つの要因に注目し、「分かち書き」の誤りがリーディング時の発話速度にどのような影響を及ぼすのか、また「分かち書き」の誤りの箇所がポーズの箇所と一致するのかを考察し、その相関関係を明らかにする。「分かち書き」と流暢性との相関関係を解明することは、日本人学習者の韓国語リーディング能力の向上へ貢献できるものであると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は韓国語リーディングにおける流暢性向上のための新たな表記指導モデルを開発することを目的とする。そこで本研究では、まず、日本人韓国語学習者の文章に見られる「分かち書き」の誤りをパターン化し、その原因を究明する。次に、韓国語の表記法である「分かち書き」の誤りが日本人韓国語学習者の発話速度とポーズに及ぼす影響を検討し、「分かち書き」と発話速度およびポーズとの相関関係を解明する。そして、「分かち書き」の指導法を改善することで韓国語リーディングにおける流暢性が向上できることを明らかにする。また、最終目標として日本人韓国語学習者における「分かち書き」の効果的な表記指導モデルを構築することを目指す。

3. 研究の方法

(1) インフォーマント

東海大学のコリア語科目を受講する日本人学生約100名、東海大学に在学する韓国人居留生約30名、東海大学のネイティブコリア語教員5名を調査対象とする。

(2) アンケート実施

韓国語教育現場における「分かち書き」の指導・教育内容を把握し、その問題点・改善点などを調べるために、アンケートを実施する。

(3) 資料収集

発話音声の録音の前に、インフォーマントの内在的な意味認識の単位を考察するために資料を収集する。東海大学の「コリア語入門1」の授業で使うテキスト『みんなの韓国語1』(吉本一他著、2009、白帝社)で抜粋した27個の文(5音節~18音節)を分析対象とし、研究対象者に日本語の文を韓国語で訳すように指示し、各文を原稿用紙のようなマス目の入った紙に書いてもらう。

(4) 発話音声の録音

東海大学の日本人韓国語初級学習者20名(男子学生10名、女子学生10名)と韓国人居留生20名(男子学生10名と女子学生10名)を対象とし、(3)で書かせた文章のうち、15語の文(各9~18音節、各3~7語節)を組み合わせた文章を読ませ、その発話音声を録音する。録音はRoland Recorder R-05を用いて静かな研究室で個別に実施し、WAVファイルとして保存する。

(5) 音声分析

音声分析は音声分析公開プログラムPraat(ver.5.4.20)を使用する。録音した音声に文字情報を加えるためにTextGridを作成し、音声波形およびスペクトログラム、聴覚的印象などにより発話時間、ポーズの時間、ポーズの頻度を測定する。

(6) 統計処理

Praatで測定した資料は統計処理プログラムSPSS(Ver.23)を使用し、統計分析する。発話速度および調音速度、ポーズの時間、ポ

ーズの頻度を測定し、日本人韓国語初級学習者と韓国人母語話者の測定値を比較するため、それぞれの分析項目について平均と標準偏差を求める。また、t 検定を行い、二つのグループ間に有意な差があるかを調べる。さらに、それぞれの分析項目間の相互関連性を調べるため Person 相関分析を行う。

(7) 信頼度

収集した発話音声の正確な測定のため、研究代表者と音声学を専攻した研究補助員(博士課程後期在学中)がそれぞれインフォーマントのポーズ区間を測定し、その測定値に関する信頼度を測定する。

(8) 分析

日本人韓国語初級学習者と韓国人母語話者の「分かち書き」に関する認識および使用実態を比較する。また、発話速度、調音速度、ポーズ時間、ポーズ頻度などについて比較して分析を行う。

4. 研究成果

(1) 韓国人留学生における韓国語の「分かち書き」の使用実態

東海大学に在学する韓国人留学生 20 名(男子学生 10 名、女子学生 10 名)の「分かち書き」の使用実態について「ハングル正書法」の規定に準じて考察した。その結果、韓国人留学生の「分かち書き」に関する一貫性は見られないことが分かった。特に、名詞と名詞の間を空けずに繋げて書く韓国人留学生が多く、名詞と助詞の間は「ハングル正書法」の規定通り、ほとんどの韓国人留学生が繋げて書いている。「名詞+」における「分かち書き」は男子学生の誤用が多く見られたが、それ以外では男女別の差はあまり見られなかった。副詞の後は全ての学生がきちんと「分かち書き」をしているが、接続助詞「(と)」の後に来る副詞「(一緒に)」は接続助詞「(と)」に繋げて書く傾向が見られた。また、「数詞+単位名詞」の場合、「分かち書き」の誤用が少なかったが、これは韓国人留学生が「分かち書き」の規定を熟知しているとは考えにくく、数詞と単位名詞の間は繋げて書いてもいいという許容規定に偶然当てはまったからだと考えられる。

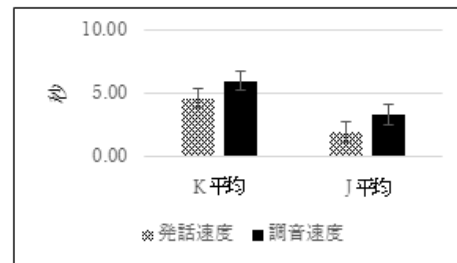
(2) 日本人韓国語初級学習者における韓国語の「分かち書き」の使用実態 韓国語母語話者との比較を中心に

東海大学に在学する日本人韓国語初級学習者 22 名(男子学生 11 名、女子学生 11 名)と韓国人留学生 20 名(男子学生 10 名、女子学生 10 名)を対象とし、「分かち書き」に関する認識および使用実態を調べた結果、日本人韓国語初級学習者の 95.4%が「分かち書き」をあまり知らず、81.8%がその学習の必要性を感じていると答えた。「分かち書き」における正解率は韓国人留学生が 72%、日本人韓国語初級学習者はその約半分の 39%であったが、韓国人留学生の正解率が高い文章に

ついては日本人韓国語初級学習者の正解率も高い傾向が見られた。名詞と名詞の間、名詞と助詞の間、名詞と「」の間、副詞の後、接尾辞「」の前、数詞と単位名詞の間の使用実態について考察した結果、今回の調査では名詞と名詞の間を空けずに書く誤用が最も多く見られた。また、日本人韓国語初級学習者と韓国人留学生ともに同一表現や同一条件においても離して書いていたり、繋げて書いたりするなど、「分かち書き」に関する一貫性は見られなかった。

(3) 日本人韓国語初級学習者における読みの流暢性に関する研究 - 区切り読みの実際の使用実態を中心に -

日本人韓国語初級学習者の区切り読みの様相を分析するため、韓国人母語話者(東海大学に在学する韓国人留学生、男女各 10 名)と日本人韓国語初級学習者(東海大学の在学生、男女各 10 名)の韓国語文章の読みにおける発話音声を比較し、それに影響を及ぼす要因について考察した。その結果、日本人韓国語初級学習者(J)の発話速度と調音速度は韓国人母語話者(K)に比べ、有意に遅く(図 1)、日本人韓国語初級学習者と韓国人母語話者はともに女子学生の発話時間と調音時間が速かった。



【図 1】発話速度と調音速度

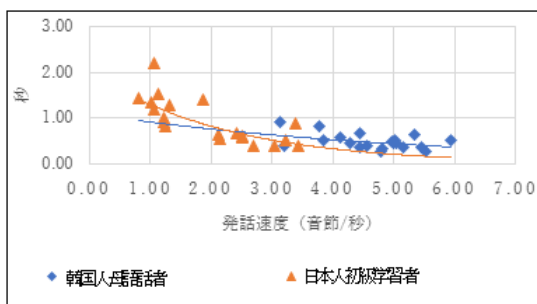
そして、日本人韓国語初級学習者の発話速度が全体ポーズ時間および全体ポーズ頻度と高い相関を見せるのに対し(表 1) 韓国人母語話者は低い相関を見せた。

【表 1】日本人韓国語初級学習者における評価項目間の相関関係

	発話速度	調音速度	全体ポーズ時間	全体ポーズ頻度	文章内平均ポーズ時間	文章間平均ポーズ時間
発話速度						
調音速度	.947** (.000)					
全体ポーズ時間	-.701** (.004)	-.591** (.042)				
全体ポーズ頻度	-.784** (.001)	-.770** (.001)	.853** (.005)			
文章内平均ポーズ時間	-.401 (.198)	-.192 (.494)	.627** (.012)	.101 (.721)		
文章間平均ポーズ時間	-.486 (.078)	-.340 (.284)	.664** (.011)	-.108 (.718)	-.587** (.027)	

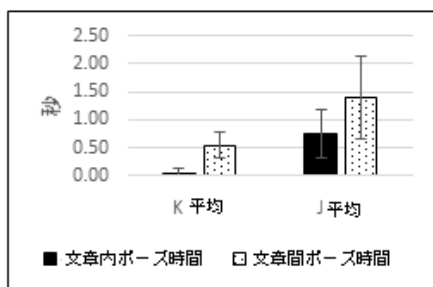
**p<.01 相関係数は 1% 水準で有意(両側)です。

韓国人母語話者は発話速度が遅い人と速い人の全体ポーズ時間に大きな差がなかったが、日本人韓国語初級学習者は発話速度が遅い人は全体ポーズ時間が長く、発話速度が速い人は全体ポーズ時間が短い傾向が見られた(図2)。以上のことから、ポーズ時間およびポーズ頻度が日本人韓国語初級学習者の発話速度に大きな影響を及ぼしていることが分かった。



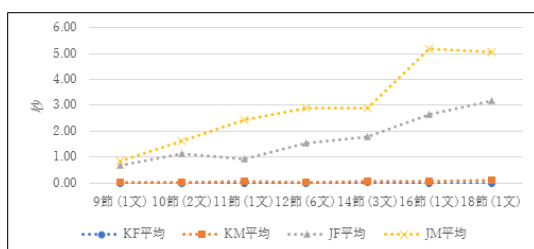
【図2】発話速度と全体ポーズ平均時間

また、韓国人は文章内のポーズ時間が短いですが、日本人韓国語初級学習者は文章内のポーズ時間が長く、頻繁にポーズを置いて文章を読むことが分かった(図3)。



【図3】文章内と文章間の平均ポーズ時間

韓国人母語話者(KF:女子学生、KM:男子学生)は文章の音節数が増えても文章内のポーズ時間に変化は現れなかったが、日本人韓国語初級学習者(JF:女子学生、JM:男子学生)は文章の音節数が増えると文章内のポーズ時間が長くなった(図4)。また、韓国人母語話者の場合、女子学生(KF)は9音節から18音節までに文章内のポーズが現れず、一度の呼吸で文章を最後まで読むことが分かった。



【図4】音節数と文章内ポーズ時間

さらに、韓国人母語話者は助詞の前で区切り読みをしないのに対し、日本人韓国語初級学習者は助詞の前で区切り読みをする傾向が見られた。このような区切り読みは日本人初級学習者の韓国語文章にもよく見られる「分かち書き」の誤りの箇所と一致するものである。また、「分かち書き」が現れる数詞と単位名詞の間においても韓国人母語話者は区切り読みをしないが、日本人韓国語初級学習者は「分かち書き」の箇所を区切って読む傾向があった。このように「分かち書き」の箇所において区切り読みをする傾向があることから、日本人韓国語初級学習者の区切り読みは「分かち書き」による干渉現象が影響していることが示唆された。

これらの研究を通して、日本人韓国語学習者の韓国語表記における使用実態を実証的に分析し、全体像を解明するためには今後さらなる大規模な資料収集・分析が必要なだけでなく、さらなる長期的な追跡調査を推し進めていく必要があることを認識できた。当初の計画では、韓国語リーディングにおける流暢性向上のための新たな表記指導モデルの開発することを予定したが、期間内には実施できなかった。本研究課題は今後も継続して取り組んでいく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

金珉秀、日本人韓国語初級学習者における韓国語の「分かち書き」の使用実態 - 韓国人母語話者との比較を中心に -、韓国語教育研究、日本韓国語教育学会誌、査読有、6巻、2016、7 - 30

金珉秀、韓国人留学生における韓国語の「分かち書き」の使用実態、異文化交流、東海大学国際教育センター異文化交流研究会、査読有、16巻、2016、1 - 17

〔学会発表〕(計1件)

金珉秀、日本人韓国語初級学習者における読みの流暢性に関する研究 - 区切り読みの実際の使用実態を中心に -、国際韓国語教育学会第26回国際学術大会、2016. 8.7、東国大学(韓国)

6. 研究組織

(1)研究代表者

キム ミンス(Kim minsoo)

東海大学・国際教育センター・特任講師

研究者番号：20734833